魔法少女リリカルなのは～極限の力～

akira

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～極限の力～

【Ｎコード】
Ｎ３３２３Ｚ

【作者名】
ａｋｉｒａ

【あらすじ】
俺は急に神と名乗る人物から「世界を救ってほしい」と頼まれた。渡された力は極限の力…エクストリームガンダム。
魔法少女リリカルなのは～極限の力～始まります。
「さぁ、極限の希望を感じろ。」
魔法少女リリカルなのはとエクストリームＶＳとのクロスです。
不定期更新ですがお願いします。

プロローグ～極限の力～（前書き）

初めましてａｋｉｒａです。
エクストリームＶＳをやってて急に書きたかったので書きました。
後悔はしてない。

プロローグ～極限の力～

気がついたら真っ白な空間にいた。
あれ？確かエクストリームＶＳをやってたんだよな、俺。

「気がついたかの？」

「おわ！」

「そんなに驚かんでもええじゃろうに。最近の若い奴らは直ぐに驚く。」

若い奴らじゃなくても驚くわ。

「まぁ、ええ。とりあえず自己紹介しとこうかの。わしはお前さんたちで言う神と言う者だ。」

「え？神様？」

「と言っても思念体みたいなもので今のこの姿はお前さんたちのイメージしている神の姿でおるだけじゃ。」

「ふーん。でその神様が俺に何の用？」

「実はお主を見込んで頼みがある。」

頼み？

「パラレルワールドは知っておるじゃろう。可能性の分だけ世界が

あるという別世界の事じゃ。」

うん、知ってるよ。だてに二次小説読んでるわけじゃないんだし。

「実はその世界の一つを救ってほしいんじゃよ。」

「なんで？」

「『リリカルなのは』は知っておるじゃろう？その世界で管理局と言う組織がいることを。」

あー。そう言えばそんな組織いたわ。

俺、時空管理局あんまり好きじゃないいんだよね。

だってまだ9歳の子供に戦場向かわすってどんな精神してるって話じゃん。

「とある世界では管理局が大幅に改善された世界もあれば、そのままの世界もある。

しかし、今回の世界では管理局の行為があまりにも酷いものでの。

わしを含めた各神達の会合で

その世界の管理局に介入することにしたのじゃ。」

「ちなみにどんな？」

「…酷いもんじゃ。あの冷酷な冥界の王さえも涙を流したのじゃ。

お前さんと同じ人間なのにあそこまで非道な事が出来るのか思うと身震いするわ。」

どうやらかなり酷いことをしてるらしいな…。

まぁ、最高評議会のトップは脳味噌だしな。考えることが逸脱して

んじゃね？

「しかし、我らが直接介入すれば世界に影響が及ぶ。そこでお主に白羽の矢が立ったのじゃ。」

「俺？」

「お前さんは特異点…。他世界に介入しても影響を及ぼさない存在なのだ。
それにお主は心優しい人間じゃ。悲しい人を救う力を持ってるんじゃよ。」

…自覚ねぇ。

「ふぉふぉふぉ…。こればかりは自覚できんよ。
さて長話はこれでおしまいじゃ。お主には直ぐに飛んでもらう。」

「おい。ちょっと待て。俺は元の世界に戻れるのか？」

「元の世界にはお主はきちんといる。
慈愛の神からの要望でな、今のお前さんは精神体で元の世界にはきちんとお主はおる。
これは大切な人達を悲しませたくないという配慮じゃ。」

そっか…なら安心した。

「それとお主にこれを渡しておく。」

俺の身体が蒼白く光りだした。

「お主がやっていたゲーム…。エクストリームＶＳかの？
そのラスボスの機体をお主の身体と同化させた。」

ラスボスの機体…エクストリームガンダム！？

「もちろん３つの支援パーツも揃えておるし、お主の意思次第で戦闘フィールドをラスボスの専用ステージに出来る。それと非殺傷設定にもできる。」

ありがたい。元々エクストリームはカルネージ・タキオン・イグニスの３つのフェイズで真の力が
発揮できる。それにエクストリーム・ユニバースなら周りの人や建物を破壊せずに済むからな。

「大体はこんな所じゃ。何か質問は？」

「無い。じゃあ行ってくるよ。」

そう言って俺の意識は薄れっていった。

神　ｓｉｄｅ

「頼んじゃぞ…。あの世界に極限の希望を与えられんこと…。」

神はそう言って粒子となって消えた。

プロローグ～極限の力～（後書き）

駄文ですがよろしくお願いします。

出会いは唐突に～悲しみを受け入れる者～（前書き）

連続投稿です。

出会いは唐突に～悲しみを受け入れる者～

「ん…？」

眩しい…。俺は少しずつ目を開ける。
真っ先に目に飛び込んできたのは見知らぬ天井だった。

「あ。気がつきました？」

俺は起き上がると声をかけられた方向に向く。
車椅子に座った少女ー八神はやてとの出会いだった。

はやて　ｓｉｄｅ

うちの名は八神はやて。広いお家で一人で住んでる。
両親は二人とも事故でなくなってもうた。
でも生活は遠い親戚のおじさんが見てくれてるから大丈夫なんやけど。

「あ、ご飯作らな。」

うちはベットを降りて車椅子に座る。
いつかは知らんけどうちの足は悪くて車椅子で生活してる。
と言ってもつらくはないんよ？だって今まで一人で生きていたから…。

「うんしょと。」

服を着替えた後、うちはリビングに行く。
そこはいつもの風景…じゃなかった。
ソファーのすぐそばで男の人が倒れてた。

「ど、泥棒…！？」

うちは直ぐに通報しようかと思ったけど、男の人を見てなぜか通報する気がなくなった。
なんて言うんやろ…？なんだか…とても暖かい感じがするからかな？
とりあえずうちは男の人に毛布を被せて朝ごはんを作り始めた。
時々様子を見たけど、まったく起きない。
朝ごはんを作り終えたとき、男の人に近づくとどうやら気付いたようや。

「あ。気がづきました？」

「…君は？」

男の人はどうやら驚いている様子。う～ん、この人が泥棒ってのは無いな。

「八神はやてって言います。お兄さんは？」

うちが自己紹介すると、お兄さんは少し考え始めた。
そんなに自分の名前を言うのに考えるものかな？

「俺の名は…ｅｘ（イクス）―だ。」

それがお兄さん…イクスさんとの出会いやった。

ｅｘ（イクス）―　ｓｉｄｅ

ふぅ…危ない。
俺の本当の名前は元の世界のモノだ。ならここに居る俺はエクストリームガンダムを動かしていた
思念体…ｅｘ（イクス）―だ。管理局に極限の絶望を送るための。

「所でイクスさんはどうしてうちの床で倒れてたん？」

俺は彼女の家に倒れていたのか。
あの神め、迷惑をかけるな。責任を負わされるのは俺だぞ！

「すまないな。俺もよくわからないんだ。」

とりあえずこう答えておく。
実質どうしてこの場所に来たのか俺にもわからない。嘘は言ってない。が本当の事も言っていないがな。

「そうなんや…。あ！しもうた！」

はやてはキッチンの方へ言った。
そう言えばなにやら焦げ臭いな。

「ああ～。焼き鮭が炭に～。」

…どうやら鮭を炭に変えてしまったようだ。

「すまない。どうやら俺のせいらしい…。」

「ううん！そんなことあらへん！元々うちが忘れてたせいやし！」

はやては手を振って答える。
俺はテーブルを見て気付いた。
食器が二人分あるのだ。

「はやて、この食器は誰のだ？」

「うちとお兄さんの分やで？」

何？
俺の？

「何故俺の分を？」

「お腹が減って倒れたんかな～と思ってな。」

…普通は警戒するか警察に通報するかだと思うぞ。
俺ならいきなり朝食を一緒に食べようなどとは思わん。

「それに誰かと一緒に食べるなんて久しぶりなんよ…。」

はやてがそう言うと悲しい顔になる。
そうだった…。
はやてのご両親は事故で亡くなっているのを忘れていた。
…彼女は孤独、そして俺も。
なら俺に出来ることは。

「はやて。」

俺ははやての頭に手を置く。

「ふぇ？」

「ご馳走になるよ。」

俺がそう言うとはやては満面の笑みになる。

「うん！ほな準備するから待っといてな！！」

はやては嬉しそうにして準備をし始めた。

そして朝食を一緒に食べる。

メニューはご飯、みそ汁、そして炭になった焼き鮭という和食の王道だ。

一緒にご飯を食べている途中、俺ははやてに有る提案を出した。

「はやて、俺は君の家族になりたい。」

「え？」

「俺も孤独だったんだ。両親はいないし、友達もいない。

ずっと一人で生きてきた。でも、今はやてとこうやっていると思うんだ。

俺は一人じゃないんだって。」

「…。」

「君が良ければ、俺は君の家族になる。どうだ？」

「ほんまに…、ほんまにうちの家族になってくれるん？」

「ああ。」

するとはやての目から涙があふれてきた。

「あ、あれ?なんでやろ?なんで泣いてるんやろ?嬉しいはずなのに…、涙が止まらへん。」

泣き続けるはやてに俺ははやての所に行き、抱きしめた。

「辛かったな…。」

「…。」

「寂しかったな…。」

「…っ。」

「でも、もう我慢しなくていい。」

「う、うえ…。」

「俺がはやての家族になるから。」

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん!!!」

はやては泣きだした。

今まで寂しかった孤独を吐き出すように。

俺はただ彼女を抱きしめるだけだった。

神　ｓｉｄｅ

わしは今送り込んだあの男ー ｅｘ（イクス）―の様子を見ている。
どうやら主要人物の一人、八神はやてとの接触に成功したようじゃな。
そして今、ｅｘ（イクス）―が八神はやてを抱きしめておる。

「そうじゃ。それがお主の力なのじゃ。気づかんでもええ。ただそうするだけで人は救われるのじゃ。」

だからこそわしは彼を推薦した。
人の弱さを認め、それを受け入れる彼を。
彼ならばこの先起きる悲劇を喰い止めれるじゃろう。
頼んだぞ…。

出会いは唐突に～悲しみを受け入れる者～（後書き）

如何でしょうか？
シリアスな雰囲気が出れば幸いです。
…出てくるかすごく不安ですが。

始まりの序曲～極限の絶望を与えし者～（前書き）

サブタイを考えるのが凄く苦手な自分…。
だれかアドバイスよろしくお願いします。

「ごめんな…。服濡らしてもうて。」

泣きやんだはやては俺に謝って来た。
服を涙で濡らしてしまったことでだ。
俺は気にするなと言ったがはやてが気にすると言いだしたため仕方なく俺が折れた。
するとはやては何か思いついたのか、リビングから出て行った。

「おまたせや～。」

手に持っていたのはメジャー？

「イクにぃの身体測らせて。」

「イクにぃ？」

「うん。だってうちら家族なんやろ？いつまでも他人行儀しとない。」

…そうか。

「そうだな。はやて。」

俺ははやての頭を撫でる。
はやても嬉しそうに笑顔になる。それは心からの笑顔だった。

はやて　ｓｉｄｅ

イクにぃのサイズを測ったあとうちらは服屋に来てる。
イクにぃは今着てる服しか持ってないからな。
ふふふ…。どんな服買おうかな？

「イクにぃ、これはどう？」

「…デザインは好きだが色がな。」

「何色がええん？」

「黒か白。」

「わかったで！」

服屋に着いたうちらはさっさくイクにぃの服探しを始めた。
でもイクにぃはおしゃれに興味がないらしくどれを選べばいいのかわからなった。
それで今うちがイクにぃに似合う服を探してる。

「次はこれや！」

「…もう勘弁してくれ。」

イクにぃはどんどん積まれていく服を見てげんなりしてる。
新しいイクにぃの一面を見れたし、なにより楽しかった。

ｅｘ（イクス）―　ｓｉｄｅ

…酷い目にあった。
服自体興味の無かった俺はデザインや色の好みをはやてに伝えて選んでもらった。
だが、それがどんどんオーバーヒートしていき、着せ替え人形のようになってしまった。

「いや～、イクにぃはイケメンやからどの服来ても似合うな～。」

買い物を沢山したせいなのかはやてはご機嫌である。
まぁはやてが喜んでいるのならそれでいいが。

（…！？）

その時だった。
頭の中に電流のようなものが流れた。
俺は車椅子を押すのを止めた。

「どないしたん？」

はやてが俺に尋ねてくる。

「はやて、一人で帰ってくれるか？」

「え？」

「何か飲み物で買ってくる。何が良い？」

「う～ん。じゃあお茶！」

「ああ。気をつけてな。」

「うん、イクにぃも早く買って来てな。」

そう言うとはやては車椅子を動かして家路に着く。
俺は反対方向に向くと、そこには仮面の男がいた。

「何の用だ。」

「…あの子と関わるのは止めろ。」

「断る。貴様ら管理局にその権利などない。」

「…！？」

どうして俺が管理局を知ってるって驚いているようだ。

「復讐は何も生まん。お前たちの方こそ馬鹿げた事は止めろ。」

「うるさい！父様の気持ちを知らないで！！」

声が男の声から女の声に変わった。
そう言えばこいつら双子の猫？だったよね。

「ふん。一人では何もできない奴に俺を倒す事はできんぞ。」

「！？」

俺がそう言うと俺の身体が人間の身体からロボットの原型になる。
まだ装甲を展開していない状態だ。

「ふん！」

俺は球体のフィールドを作りだす。そこに表されるのはガンダムの戦闘の記録。

「はあああぁぁぁぁぁぁ！！！」

記録達が俺の身体に取り込まれる。
そしてそれは一つの機体の姿になる。

「さぁ、管理局よ。お前に極限の絶望をくれてやる。」

俺はこの瞬間、エクストリームガンダムとなった。

始まりの序曲～極限の絶望を与えし者～（後書き）

やっとエクストリームガンダム登場。
ちなみ主人公の年齢は１８歳です。

極限の絶望？～殺戮のカルネージ～（前書き）

初戦闘です。
グダグダなのは許してください。

極限の絶望？～殺戮のカルネージ～

アリア　ｓｉｄｅ

私の名はリーゼアリア。
父様の命令で私は八神はやてを監視していた。
だが、不測の事態が起きた。
それは昨日までいなかった謎の男だ。
彼は彼女と一緒に服を買いに行っていた。
その帰り道に警告をした。「彼女と関わるな」と。
でもその返答はそれ以上のものだった。
管理局を知り、そして私達の目的を知っていた。この男は危険だ！
そう思った時。

「ふん！はあああぁぁぁぁ！！！」

男の身体が光だし、そこに居たのはあの男でない。

「さぁ、管理局よ。お前には極限の絶望をくれてやる。」

人型の…ロボットがいた。

ｅｘ（イクス）―　ｓｉｄｅ

エクストリームガンダムへとなった俺は次に戦闘フィールド『エクストリーム・ユニバース』を展開した。
住宅街から一変。巨大な結晶がそびえ立つフィールドとなった。

「こ、これは！？」

「アリア！」

どうやら監視をしていたのは姉のアリアか。今来たのは妹のロッテか。

「お前何をしたんだ！」

「ふん。貴様管理局とは違い、俺は環境破壊をしたくないのでね。このフィールドを展開させてもらっただけだ。」

「でもこっちにはあたしたちがいる。…あまりこのような行為はしたくなっかったけどあなたを連行します！」

連行か…。

まぁガンダムに変身したり、フィールドを展開したらそうなるわな。だが、ただでやられる俺ではない。

「やれるものならな。カルネージ・フェイズ展開。」

俺の真下に黒い装甲の大型パーツが現れる。

俺はそのまま下に降り、カルネージ・フェイズと接続する。

「さぁ、殺戮の宴を始めよう。」

「「！！」」

俺は右手に大型ビームライフルを構え、二人に放つ。

二人は二手に分かれるが、元々このライフルは牽制だ。

「爆ぜろ！！」

俺は両手を広げて火球団を４発水平にアリアに放つ。
そのうちの一発に当たるとアリアはスタンした。

「か、身体が動かない！」

「アリア！？」

「受けてみよ！」

次にコンテナミサイルを放つ。上空に発射されたミサイルはロッテに向かってミサイルの雨として降り注ぐ。

「キャアァァァ！！」

ミサイルで足止めされるロッテ。
俺はとどめの一撃を放つために真上に飛んだ。
コンテナを肩にマウントし、それを地上に向ける。
中心地は二人からやや外れた位置。

「光に包まれるがいい！！」

俺は照射ビームを地上に向け放つ。
そして地上に当たるとそこを中心に巨大な爆発が起こる。
二人はシールドで衝撃を抑えているようだが、この攻撃はまだ終わっていない。

「な！？」

ロッテが驚く。
それは地上から火柱が爆心地を中心に広がっていくからだ。
このフィールドはエクストリームガンダムの意思で自在に出来る。
火柱が二人を包み込んだ。

「「キャアアアアアァァ！！！」」

俺は火柱が収まると地上に降りた。

「どうした？俺を連行するのではなかったのか？」

「あ、ああ…。」

アリアの顔は仮面で見えないが恐らく絶望を感じているのだろう。
ロッテは気絶して変身が解けている。
…これぐらいで良かろう。

「もう一度言おう。俺はお前の指図は受けない。
そして万が一俺の家族に手を出してみろ…。その時は貴様らを殺す。
」

ありったけの殺気を込め、俺はフィールドを解除し、その場を後にした。
…いけね。お茶買わなきゃ。

帰った時、はやての頬が膨らんで怒っていたのは余談である。

極限の絶望？～殺戮のカルネージ～（後書き）

グダグダだ…。
文才が欲しい…。

日常？～人とは絆で繋がる者～（前書き）

日常パートです。
ある程度のご都合主義があります。
そしてやっと魔王登場です。

日常？～人とは絆で繋がる者～

俺がはやての家族となって早１ヶ月。
はやての病気を見てくれる石田先生に紹介したりと結構平穏だった。

「うん。経過は良好のようね。この療法で行きましょうか。」

「はい！ありがとうございます！」

今、俺達はいるのは海鳴総合病院。
はやての病気の検診に来ている。
彼女の病気は原因不明の足の麻痺。しかし、その原因ははやての部屋の本棚にある魔導書だ。
ロストロギア通称『闇の書』。
蓄積型の魔導書で全６６６ページを埋めると巨大な力が手に入ると言う管理局が勝手に決めた危険物だ。
しかし、本当の名は『夜天の書』であり、歴代の主が手を加えたせいでそうなってしまっただけの代物だ。
一応神が残してくれたのか俺の力でこいつのバグは直せるらしい。
もっとも今はその時期ではないが…。

「ｅｘ（イクス）―さん。ちょっとはやてちゃんの事でお話があるんです。良いですか？」

「ええ。構いません。はやては少し待ってくれるか？」

「ええよ～。じゃ、待合室で待ってるな。」

診察室から出たはやてを見送り、俺と石田先生になる。

「この1ヶ月間、はやてちゃんの病気は良好になっています。病気についても前向きに考えてます。」

「そうですか。」

「私は医者とは言え他人です。あの子の心を救えるのはあなただけ。どうか、これからも助けてあげてください。」

「はい。解りました。」

俺は石田先生の言葉を心に刻み、診察室を出た。

はやて　ｓｉｄｅ

病院から出たうちらは商店街で買い物をしていた。
今日の夕飯の担当はイクにぃや。イクにぃは料理が凄く上手くてうちよりもおいしいねん。
イクにぃの作るご飯はうちの楽しみの一つや。

「イクにぃ今日は何を作るん?」

「今日はそうだな…。中華料理だな。デザートに杏仁豆腐でも作ろうと思ってな。」

「やった!!」

思わず口に出てもうた／／／。

でもイクにぃはデザートが正直おいしい。
イクにぃが初めて作ったゼリーなんか食べた瞬間おしかったもん。
絶対いい旦那さんになれるわ。

（だ、旦那さんか…／／／）

私はイクにぃが大好きや。でもそれは家族としてもやけど一人の女性としても好き。
たぶんあの日、家族となってくれた日にうちは惚れてもたんやろうな／／／。

「はやて？どうした？」

「ふぇ！？ううん！！今日は少し暖かいな思うて。」

「そうだな。もう5月だな。」

イクにぃと出会ってもう1ヶ月…。
イクにぃはうちと一緒に行動をしている。仕事を探す時も出来るだけうちの時間を作りたいからって
図書館の司書さんをしている。だからうちもイクにぃが仕事の時は図書館におる。
もううちらは本当の家族なんや。
ずっと、ずっとこんな日が続けばいいな…。

ｅｘ（イクス）―　ｓｉｄｅ

俺は商店街である店を見つけた。そう原作主人公である高町なのはのご両親が

経営している喫茶店『翠屋』だ。
ちょうど3時のおやつには良いと思い、はやてに声をかける。

「はやて。ちょうどそこに喫茶店があるから行ってみないか？」

「そやね。ちょと休憩したかったし。」

はやては快く快諾してくれた。
俺ははやての車椅子を押すため、はやてが扉を開ける。

「いらっしゃいませ～。」

「すいません。大人一人に子供一人。ちょっと足が悪いんで…。」

「わかりました。」

対応をしてくれたのは高町士朗氏。
カウンター席だが、士朗氏がはやてに合う椅子を用意してくれた。

「ご注文は？」

「えっと…うちはオレンジジュースとシュークリーム。」

「コーヒーとシュークリームで。」

注文を取ってくれたのは高町桃子氏。
この『翠屋』の料理を作ってくれる人だ。シェフというよりかパティシエに近いな。
注文の品が来るまでの間、士朗氏が何か気になったのか声をかけてきた。

「君たちは兄妹か何かかい？」

「ええ。と言うより家族ですね。血は繋がってませんが。」

「どういうことだい？」

「…ちょっとこの子の前では少し。」

その時、扉のチャイムの音が鳴る。

「ただいま～。」

「おお、なのはか。」

入って来たのは原作主人公高町なのは。別名『魔王』と呼ばれる少女だ。

…絶対Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩは受けないぞ！

「あれ？お客さん？」

「ああ。そうだ、なのは。この子と話し相手になってくれないか？」

「それがいい。はやて、一緒に話しても良いぞ。」

「「うん！」」

やはり同い年なのか互いに興味があったようだ。

二人は俺たちがいる所から少し離れた場所でお話を始めた。

士朗　ｓｉｄｅ

俺は今はやてと名乗る子と一緒に入って来た男と話をしている。
妻の桃子が注文の品をはやてちゃんに運んだ後、彼にも運んで私と一緒に話している。

「ではあの子は今まで？」

「ええ…。一人でずっと生活していました。」

私と桃子は驚きを隠せない。
なのはと同い年の子が一人で…。

「頼みがあります。」

「頼み？」

「もしよければはやての事を気にかけてくれませんか？」

「…どうしてですか？」

桃子が質問する。
すると彼の様子が変わった。

「…自分には成さねばならぬ事があるからです。」

その目は戦士の目だ。
大切な何かを守るための覚悟をした目だ。

「…わかったわ。私達もできるかぎりはやてちゃんを見かけたら声をかけてみるわ。」

「ああ。それになのはの友達だしな。」

彼ははやてとなのはの方に顔を向けると凄く優しい目になった。

…これが本当の彼かも知れないな。

なのは　ｓｉｄｅ

私、高町なのはと言います！

やっと私が登場出来たの！あれ…私何言ってるんだろ？

今日はジュエルシード探しは休みで翠屋に向かうと私と同じぐらいの子が来てたの。

お父さんが女の子と話相手にしてと頼まれた。

女の子は八神はやてちゃん。私と同い年！

一杯お話したの。はやてちゃんが話すのは一緒に来てた男の人（イク）ｅｘ（ス）｜さんの事ばかり。

はやてちゃんがｅｘ（イクス）｜さんの話をするときはすごく活き活きとしてた。

「じゃあね。はやてちゃん！」

「うん！また来るね！」

はやてちゃんとｅｘ（イクス）｜さんがお店に出るとき、お母さんがシュークリームを入れた箱を

はやてちゃんが膝に乗せてる。

「ありがとうございます。美味しかったです。」

「いえいえ。今度ｅｘ（イクス）―さんのデザート食べさせてくださいね？」

「ああ、君の入れるコーヒーもね。」

お父さんとお母さんもｅｘ（イクス）―さんの作るデザートに興味があるのか凄く仲が良い。

「では。」

「「「ありがとうございました～。」」」

最後は皆で送りだした。

これが私とはやてちゃん…、そしてｅｘ（イクス）―さんとの出会いだった。

日常？～人とは絆で繋がる者～（後書き）

なんかはやてがヒロインぽい感じです…。
でも主人公は鈍感設定なので気づきません。

夜天覚醒～原作開始～（前書き）

連続投稿です。
ようやく原作開始です。
…前振りが長くてすいません。

夜天覚醒～原作開始～

あれからさらに数ヶ月、俺はいつも通りはやてと一緒に病院で石田先生の診察を待っていた。

「はい。お薬出すからきちんと飲んでね。」

「ありがとうございます。」

はやては確かに病気に関して前向きに考えてる。

やはり俺と言う存在がいるのだろうか？…自覚はないが、そうであるなら嬉しい限りだ。

「すいません。ｅｘ（イクス）―さんだけ残ってくれませんか？」

「はい。すまないな、はやて。」

「ええよ。でもイクにぃはうちのモンや！石田先生には渡せへんで！」

その言葉に俺と石田先生は笑う。

「それでどうしたんですか？」

「ええ、実は明日、あの子の誕生日なの。何かプレゼントとか考えているのかと思ってね？」

「…え？」

「まさか知らなかったの？」

「ええ…。」

あいつ…。そんな大事な事を教えて貰ってない。
まぁ、それに気付かなかった俺も俺だが…。

「そう…良かったわ。」

「ありがとうございます。大切な事を教えてくれて。」

「いいわ。私もあなたのデザートを貰ってるし。」

俺はもう一度お礼を言って診察室を出た。
さて、サプライズを準備しなきゃな。

はやて　ｓｉｄｅ

しもうた…。
明日はうちの誕生日やった…。しかもイクにぃに教えてない！！
でも、今さら言うんも恥ずかしいし…。
そうこう考えていたらもう夜中の１２時前。
うちはベットで右に転がったり、左に転がったりしながらどうしようかと考えてとる。

（…ううん！これはチャンスや！明日誕生日教えてビックリさせるんや！）

これぐらいなら罰が当らないと思いそう考えた。

そして時計の針が１２時を指す。

その時やった。

本棚から禍々しい光が放っているのを。

ｅｘ（イクス）―　ｓｉｄｅ

ふぅ…。出来た。今俺が作っているのはケーキだ。しかもワンホールケーキ。

シンプルな苺のケーキだが出来栄えは十分だろう。これで誕生日ケーキが出来た。

時計を見るともうすぐ１２時…。ちょっと待て。たしかこの後ー。

「うぉ！？」

家が大きく揺れる！しまった…！たしかこの日は！！

「はやて！！」

俺ははやての寝室に向かう。

そこにいたのは見知らぬ４人。

「闇の書の起動…確認しました。」

「我ら闇の書の蒐集を行い、主を護る守護騎士にてございます」

「夜天の空に集いし雲。」

「ヴォルケインリッター…、何なりと命令を。」

はやての前に居るのはヴォルケインリッター…、闇の書の騎士たちだった。

シグナム　ｓｉｄｅ

私は闇の書の騎士、ヴォルケインリッターの将シグナム。
闇の書の起動が確認されたため、新たな主の前に現れた。
だが、主から返事がない…。その時、気配を感じた。

「お前は何者だ？」

その場に居たのは男だ。
傍に居るシャマルとザフィーラは主の傍に行き、ヴィータは私の隣で男を警戒している。

「俺は彼女の家族だ。」

「それを信用しろと？」

「できるだけならな…。」

男はまるで諦めるように言った。
恐らく信用されていないと思ったのだろう。
そうであったとしても主に害を為す物は排除しなければならない。

「はん！信用出来るか！」

ヴィータがそう言うと男はため息をついた。

「ならば勝負だ。俺が勝てば俺の話を聞いてもらうぞ。」

負ければ好きにしろと言う事か…。おもしろい。

「いいだろう。我らベルカの騎士。勝負を挑まれて逃げるわけにはいかん。」

「おもしれぇ！ぶっ潰してやろうぜ！」

「なら、我とシャマルは主を見ておく。」

「気をつけてね。」

私は愛剣のレヴァンティンを、ヴィータはグラーフアイゼンを出した。

しかし、男は何も武器を出さない。

「ふん！はぁぁぁぁぁ！！！」

男の身体が急に光りだした！？何が起こった！？

「さぁ、極限の力を見せてやろう。」

光が収まるとそこに居たのはロボットがいた。

こ、こいつは一体何者なのだ…！？

夜天覚醒～原作開始～（後書き）

次は戦闘シーンです。

極限の絶望？～剣舞のタキオン～（前書き）

連続投稿その２です。
今回はタキオン・フェイズが登場します。

極限の絶望？～剣舞のタキオン～

俺はエクストリームガンダムへと変身し、戦闘フィールド『エクストリーム・ユニバース』をシグナムとヴィータにのみ展開する。シャマルとザフィーラははやての傍に居るため展開は出来ない。

「な！？なんだこれは！？」

「てめー、いったい何しやがった！？」

あの猫姉妹もそうだったがやはりこれは魔法ではないらしいな。ミッド式、ベルカ式でもないこの現象は未知の物か。

「安心しろ。このフィールドははやてに危害を加えたくないために展開しただけだ。」

「なるほどな…。」

「さっさと降りてきやがれ！ボコボコにしてやる！！」

ヴィータはさっきから怒鳴っているが、シグナムは頭は冷静だが唇が僅かに上がっている。
バトルマニアとしての血が騒ぐのだろうか？

「なら、望みどうり降りよう。タキオン・フェイズ展開。」

俺の下にカルネージ・フェイズとは違う紅い装甲をした大型パーツが現れる。

俺はそのまま下に降り、タキオン・フェイズと接続を完了する。

「さぁ、極限の力を見せてやる。」

俺は背中から大きな柄を取り出し、大型ビームソードを展開し構える。

「一つ聞きたい。お前は騎士なのか？」

「…違うな。俺は騎士ではない。ただ…。」

「ただ？」

「大切な家族を守るために手にした力だ！」

ヴィータ　ｓｉｄｅ

「舞え！」

ロボットの持つでけぇ剣からでかい刃があたしらに向かってくる。
でも遅ぇし、こんなの余裕で回避…！？

「これは！？」

床が上がる！？これじゃ身動きができねぇ！！

「くっ！障壁！」

＜Ｐａｎｚｅｒｈｉｎｄｅｒｎｉｓ＞

グラーフアイゼンが障壁を張ってくれたおかげで何とかダメージは抑えれた。
地上じゃ不利だ！空で戦うしかねぇ！

［シグナム！］

［わかってる！］

どうやらシグナムも地上で戦うのは不利だと感じたみてぇだ。
あたし達は空に飛んで反撃する。

「テートリヒ・シュラーク！！」

「飛龍…一閃！」

シグナムはレヴァンティンを連結刃に変えて飛龍一閃、そしてあたしはテートリヒ・シュラークでロボットを叩き潰す！

「照らし出せ！」

あいつがそう言った光があいつを中心に衝撃波が出て、瞬間飛龍一閃が相殺される。
次にあいつは剣をすくい上げると床のマス目にそって落雷が降り注いでくる！
いけねぇ！？あたしはもろに直撃を喰らった。

「刹那に刻め！」

な、何だよ！？あいつ身体を回転させながらこっちに来やがった！

「ちくしょおおおおお！！！」

何もできなかった自分がくやしくてあたしは叫んだ。

シグナム　ｓｉｄｅ

何と言う剣の腕だ…。ヴォルケインリッターであるヴィータを倒すとは。

だが、何よりもあの剣筋にあるのは奴の言っていた思いが込められているのが解る。

もっとも勘でしかないのだがな…。

「はあぁぁ！！」

私はレヴァンティンを剣に戻すと奴に斬りかかる！

「うおぉぉ！！」

奴も負けじと私に斬りかかる。

１０回、いやそれ以上だろう。こうやって斬り合ったのは。

私はインナーがボロボロだが、奴の装甲も私の攻撃でボロボロになっている。

「はぁ、はぁ…。」

「ふぅ…。」

私達は互いに距離を取っている。

「…どうした?何を笑っている?」

「いや…。私の早とちりを少し笑っていたのだ。」

剣を斬り合って解った…。
奴の言っていた事は本当だった。
今、思えばその場で戦闘をしいても良かったのだ。
だが、それをこのフィールドで主に危害を加えないようにしていた。

「確かにあなたは主の家族なのかも知れません…。ですが、私は騎士です。
戦いを挑まれた以上、私に敗北は許されないのです。」

「それはこちらも同じだ。例えはやてから拒絶されようとも俺は彼女を守る。」

私はカートリッジを残り全てを使う。これが私の全力。
奴も手にした剣がさらに長く大きくなる。
…これが最後の一撃になるだろう。

「紫電…。」

「…!!」

私は剣を振りかぶり、奴に斬り掛る。
それと同時に奴も剣を大きく薙ぎ払う動作をする!

「一閃!!」

「はぁ！！」

ぶつかった瞬間爆発が起きる。
私は奴の後ろに立ち、奴は一歩も動かない。

「く…。」

奴はうめき声をあげた。
だが…。

「あなたの…勝ち…です。」

私はそう言って意識を失った。

ｅｘ（イクス）―　ｓｉｄｅ

まさかここまでやられるとは…。
今俺はショートしているタキオンの右腕を見ている。
あと一歩間違っていたら倒れていたのは俺かも知れない…。

「…さて、戻るとするか。」

俺は気絶している二人を見て、今後どうしようか考えた。
…やべ、もう夜中の２時半まわってるじゃん。

極限の絶望？～剣舞のタキオン～（後書き）

…ヴィータ不遇（汗）

ヴィータファンの皆様すいませんでした。

誕生日～家族というプレゼント～（前書き）

深夜に投稿です。あと二つ投降します。

誕生日～家族というプレゼント～

シャマル　ｓｉｄｅ

私とザフィーらは消えた二人とロボットとなった男と共にどこかに消えた…。
魔力が感じられなかったから転移魔法じゃない？

「！？」

そう考えていると空間が歪み、現れたのは先ほどの男性。
その隣にはシグナムとヴィータちゃんが気絶してしる。

「シグナム！ヴィータちゃん！！」

「動くな、シャマル。」

私が二人の元へ行こうとするとザフィーラに止められた。

「…。」

男性はヴィータちゃんを抱きかかえて、私達の方へ差し出した。

「気絶はしているが、傷はそれほど深くない。だが、念のため君が治療をしろ。」

彼はそういうとヴィータちゃんを降ろし、次にシグナムを運んできた。
私はその様子に戸惑いつつも二人に治癒魔法をかける。

「…その様子では二人は負けたようだな。」

「ああ。だがそこのピンクの子に一撃入れられたけどな。」

たった一撃…。私達の将が彼に一撃しか与えられなかったのに驚きを隠せない。

「俺が勝ったから俺の話を聞く。いいな?」

「…わかった。」

ザフィーラは少し考えた後、頷いた。

「…お前らの部屋準備するからとっと寝ろ。」

「「…は?」」

はやて　ｓｉｄｅ

「うーん…。」

あれ?うち、いつの間に寝てたん…?って!?なんでイクにぃが同じベットで寝てんの!?

あかん!あかんて!!まだうちら結婚しとらんねんで／／／！

「ん…?起きたか、はやて。」

イクにぃは目を覚ました。
うちは顔を赤くするのをなんとか我慢する。

「お、おはよう。イクにぃ。」

「ああ。おはよう。はやて、服を着替えたら少し話したいことがあるんだ。良いか?」

話したいこと?それって…まさかプロポーズ!?
あかんで／／／!うちはまだ8歳や!そ、それにまだ心の準備が…／／／!!

「…?どうした?」

「な、なんでもあらへんよ／／／!!あ!ほらイクにぃ、朝ごはん作らなあかんで!!」

「…そうだな。あいつらの分も作らなきゃな。」

うちはなんとか誤魔化したけど、イクにぃは最後小声でなんか言ってた。聞こえんかったけど…。
とりあえず服を着て、リビングに向かったけどいつもの風景やなかった。

「おはようございます。主。」

「「「…。」」」

うちの前には見知らぬ4人がおった。

「…お前たち、はやてが困惑しているぞ。」

うん。めっちゃくちゃ困惑してる。

…どういうこと？

ヴィータ　ｓｉｄｅ

あたしの名はヴィータ。

…今、あたし達は昨日あたしとシグナムをボコボコにした奴のご飯を食べてる。

それは数分前の事だった。

ー数分前。

「今日はフレンチトーストだ。すまないな。」

「ううん…かまへんよ…。」

あたしらの新しい主は困惑しながらあたしらを見てる。

…こいつも今までの奴らと同じなんだろうな。

するとテーブルにさらに４つ皿が置かれた。その皿の上に乗っているのはあいつと同じ料理だった。

「あの、これは…。」

「…冷めるぞ。」

あいつはそう言って居間から出て行った。
その時、新しい主が少し笑ってた。

「イクにぃはある意味不器用やからな。うちらと一緒に食べよって言ってんよ。」

あたしたちのために…？
あたしだけじゃなく、シグナムたちも茫然としている。
そうしていたらあいつが戻って来た。

「ん？まだ食べていないのか？」

「あはは…。何や変な人やらなぁ。イクにぃの料理はとてもおいしいのに。」

…確かに良い臭いだけど。

ぐぅぅぅぅ…。

!？し、しまった!!

「ヴィータちゃん。もしかして…。」

「ち、違う!!そんなんじゃねぇ!!」

「…手遅れだ。諦めろ。」

～～／／／!!もう我慢できねぇ!
あたしは料理はあるテーブルへと行き、椅子を座ってフォークとナ

イフを使って料理を食べる。
！！…やばい、テラうめぇ。あたしは料理を食べて思った。

ｅｘ（イクス）―　ｓｉｄｅ

俺たちは朝食を食べ終えてはやての部屋にいる。
…しかし、朝食でまさかヴィータだけじゃなくシグナムまでおかわりを要求するとは。
それほど腹が減っていたのか？（※単純においしかっただけ。）

「そうなんや…。この子は闇の書って言うんやね。」

「御意。」

今、はやてはシグナム達から闇の書に関する事を聞いている。
聞いていたがやはりアニメの設定どうりだ。

「夢の中で何か言っていませんでしたか？」

「うーん。曖昧やけど…なんか言うてたような…、あった。」

はやては小棚からメジャーを取りだす。

「でも、ひとつ分かったことがある。闇の書の主として守護騎士皆の衣食住きっちり見なあかんと言う事や。幸い部屋は余ってるし料理はうちとイクにぃが出来る。皆のお洋服を買ってくるからサイズ

測らせてや。あ、イクにぃは出てってな。」

ま、こうなるだろうと思ってたけど。

ザフィーラ　ｓｉｄｅ

我はヴォルケインリッター盾の守護獣、ザフィーラ。
今、我は変身し、狼の姿になっている。…決して犬なのではない。
そして廊下にいる。

「あ！これかわいい～！ヴィータ！これ着てみて！！」

「え！？お、おう…。」

「ふむ…。下着にもこんなに種類があるとはな。」

「これにしようかしら？」

居間では女性陣が洋服を物色している。
…今までの主はこのような事をしてくれなかった。

「…どうしてって顔しているな。」

「お前は…。」

家に入って来たのは主の家族…ｅｘ（イクス）｜。

両手には大きくなった袋が入っている。

「簡単さ。彼女は優しいのさ。」

「…まるで経験しているような言い方だな。」

「俺もお前たちとは違うがこの家に倒れていた。そこで彼女は何をしていたと思う?」

…?

「はやては俺の分の飯を用意してたのさ。」

…それは今朝ｅｘ(イクス)―がしたことと同じ。

「それにこれは彼女にとってとんだサプライズにもなったしな。」

ｅｘ(イクス)―はそう言って居間に入って行った。

我も後に続いたが、…サプライズとは?

はやて　ｓｉｄｅ

夜になってヴィータと一緒にお風呂に入った。いや～、お風呂は良いわ～。

今日の晩御飯の担当はうちやってんけどイクにぃが「今日は俺がやる。」と言った。

何するんやろ？

リビングに入るとテーブルのは豪華な料理が並んでる。
その中でも目を引いたのは真ん中にある苺のホールケーキ…。

「はやて、上がったか。」

「う、うん。イクにぃこれは？」

「お前の誕生日パーティに決まってるだろ？」

うちの…誕生日パーティー？

「石田先生から教えて貰ったんだ。慌てたぞ？」

あのケーキ…。もしかして夜のうちに作って…？
うちはイクにぃに連れられ椅子に座る。
そしてそのケーキのチョコレートの板にはこう書かれた。

＜ハッピー・バースデー！はやて！＞

…ずるい。ずるいわぁ。
うちの方が驚いてもうたやん。

「はやて。誕生日、おめでとう。」

「おめでとうございます。主はやて。」

「…おめでと。」

「はやてちゃん。おめでとうございます！」

「…おめでとうございます。」

皆…。

今日は、今日は最高の誕生日や…！

ありがとうな…、イクにぃ…。皆…。

事情説明～ｅｘ―（イクス）～（前書き）

連続投稿その１です。
ここではかなりご都合主義・オリ設定があります。
注意してみてください。

事情説明～ｅｘ―（イクス）～

誕生日パーティーが終わった後、はやての部屋にはやてとヴィータを寝かせた。
…やはりまだ子供だな。

（そうだ…子供は宝なんだ…。）

俺は二人に布団を被せ部屋を出る。
そしてリビングにはシグナム、シャマル、ザフィーラが待っていた。

「…聞かせて貰おうか？お前の正体について。」

「ああ…。」

俺は…この家族を守ってみせる。
例え世界から疎まれたとしても…。

シグナム　ｓｉｄｅ

私達は今、私とヴィータを倒した男、ｅｘ（イクス）―と話している。
その中心にあるのは奴の正体だ。
奴は人間の身体からいきなりロボットへと変身した。そして魔法ではない何かで別の場所に転移された…。

「まず、俺は人間ではない…。どちらかと言えばシグナム達に近い存在だ。」

「私達に近い存在だと？」

「そうだ。俺は肉体を持たぬ思念体だ。」

私達は闇の書の守護騎士プログラム…、つまり人間ではない。
しかし、奴が我らと同じ…。しかも思念体とは…。

「どうしてそうなったんですか？」

「俺はかつて人間だった…。だが、ある組織により俺は肉体を失い、思念体となっていた。
そこであのロボット…。エクストリームガンダムの変身能力を手にした。」

エクストリームガンダム…。それがあのロボットの名前か。

「どうして変身できるようになったのか…それは俺にもわからない。
しかし、エクストリームになってから、俺は組織に狙われ続けた。」

「その組織とは何だ？」

ザフィーラが言った。

「…君たちも知っている組織、時空管理局だ。」

「「「！？」」」

ex（イクス）―side

今俺が話しているのは真っ赤な嘘だ。しかし、俺が話している事はあながち間違いでなはない。
夢の中で何度も残虐な風景を見せられる…。たまったものではない。

「時空管理局は人材の人手不足を解消しようと裏では様々な非道な人体実験を行っていた。
そこで出されたプランの一つ…。それは人間の人格を完全にデリートすることだった。」

「デリート？」

「管理局は自らの正義が正しいと思わせるよう人格を完全に破壊し、忠実な人形にしようとした。」

「なんという…！」

「俺はその実験の最中、肉体が実験に耐えられず死んだが、意識は思念体となって世界を彷徨った。
そして俺は力を手に入れた。」

「それが…エクストリームガンダムと言うわけか。」

…正直、嘘を言うのはつらい。だが、ここで管理局が間違ったことをしていると教えなければ彼女たちも…。

「俺はエクストリームガンダムの変身能力を得ると、それを応用し、今の身体を作りだした。」

「でも、あなたには魔力は感じられないわ。」

「元々エクストリームガンダム自体が別世界の産物だったのさ。」

「別世界の産物だと。」

「ああ、エクストリームガンダムを調べてたら、こいつに共通する言葉があったのさ。
それは…ガンダム。」

「ガンダム？」

「元々こいつの世界では全長１８ｍもの巨大なロボットを人が動かし、戦争をしていた。
だが、こいつが生まれた時点で地球圏には人がいなかったそうだ。
…恐らく戦争で全滅したんだろうな。」

嘘は言っていない…はず。

「では、あの巨大なパーツはなんだ？」

「あれは近接戦闘特化型パーツ［タキオン］だ。そして砲撃戦闘特化型の［カルネージ］、
広範囲戦闘特化型の［イグニス］がある。」

「あんなのがあと２つもあるのか…。」

確かにな。初見でどうやって倒したら良いのかわかんねぇわな。

「そしてあのフィールド…［エクストリーム・ユニバース］はエクストリームガンダム専用の戦闘フィールドだ。俺の意思で展開でき、周辺の環境にはなんの影響もない。」

俺はそう言って立ち上がり棚からコップを４つ取り出す。
そして冷蔵庫からジュースを取り出し、注いでいく。

「話しを戻そう…。俺が能力を手に入れたことで管理局は動き出した。
目的は言われなくてもわかるだろう。」

「捕獲して自分たちの物にするため…。」

シャマルがつらそうに喋る。

「幸い、非殺傷能力が効くことが解ったから俺は追っての連中を全て倒した。
そして俺ははやてに助けられたのさ…。」

話を終えた俺はそう言ってジュースを飲む。
…やはり嘘は言いたくないな。

シャマル　ｓｉｄｅ

ｅｘ（イクス）―さんは私たちが想像を絶するほどのことを体験したのね…。

「俺はもう戦いたくない。だが、はやてを傷つけるというのなら俺は戦かう。

それはお前たちも一緒だ。俺たちは家族だからな。」

ｅｘ（イクス）―さんがそう言うと少し笑った。

なんて優しい笑み…。

「すまないな…。暗い話をして。もう寝よう。」

ｅｘ（イクス）―さんが立ち上がり出て行こうとする。

私は思わず立ち上がった。

「大丈夫ですよ。ｅｘ（イクス）―さん。」

「え？」

「それは私達も同じ気持ちですから。」

「そうだ。我らは家族だ。お前一人に戦わせるわけにはいかん。」

私とシグナムの言葉にザフィーラも頷く。

「そうだな…。俺は一人じゃないんだよな…。」

ｅｘ（イクス）―さんが小さく呟く。

「ありがとう…。」

そう言って部屋を出た。

「二人とも。この話は主には話さないでおこう…。」

「ええ…。」

「いつか…自分で話すときまで我らは待とう…。」

私達はそう誓った。

日常？～平穏が一番～（前書き）

日常パートその2です。

日常？～平穏が一番～

「ｅｘ（イクス）―～、まだか～？」

「はしたないぞ、ヴィータ！」

「良いじゃない。それにシグナムだってｅｘ（イクス）―さんのデザート楽しみにしてたくせに～。」

「なっ／／／！？べ、別に私は…／／／／！！」

「あはは。シグナム顔真っ赤やで～。」

「主！」

…現在俺は大忙しである。

なぜなら今俺は必死にデザートを作ってるからである。

ヴォルケインリッターが家族になって早１週間。

シグナムは剣の稽古で、ヴィータはデザートで、シャマルは料理で、ザフィーラは筋トレで仲良くなった。

しかしヴォルケインリッター女性陣がもっとも楽しみにしているのは俺の作るデザートだ。

はやての誕生日の日は俺の事を警戒していたのだが、その翌日ヴィータにもう一度食べたいと言い出したのだ。

だが昨日のケーキはすでに完食済みのため、代わりにとしてのプリンを作ってあげたのだ。

ちなみにその時のヴィータの感想は

「人生でこんなテラうめぇプリン食った事ねぇ…。」

と涙を流しながら食べていた。

それを聞いたシグナムとシャマルも食べたいと言い出し、食べさせたのだ。

ちなみにザフィーラは甘いものは苦手なのでザフィーラの分は作っていない。

「ほい。できたぞ～。今日はゴマ団子だ。」

「へ～。珍しいな。イクにぃがゴマ団子なんて。」

「ゴマが安かってな。」

「へっへ～。も～らい！」

「あ！ヴィータちゃん！それは私の！」

「うむ…。また腕を上げたな。」

八神家の女性陣はゴマ団子をおいしそうに食べる。

管理局に入らなかったら『八神食堂』を開くのも手なのかも知れないな。

そう考えていくと一人落ち込んでいる奴がいた。シャマルだ。

「どうした？」

「うう…。どうして私の料理は上手くならないのかしら…。」

「仕方ねーだろ。シャマルだし。」

「そんなことないもん！！」

そう。俺も元の世界では「シャマルの料理は壊滅的」と言う情報を聞いていた。

二次小説では挙句の果てに毒物を作りだすまでだった。

俺も一応シャマルの料理を見てみたが、それはもはやテレビどころか漫画ではお見せできない物だった。

軽くホラーだった。

ちなみに我が八神家では食事担当は俺・はやてとなっており、月・水・金がはやて、火・木・土が俺で日曜日が交代でやっている。

シャマルは主にサポートに回ってくれるが、俺とはやてがサポートして一品作るまでは許可している。

ちなみに前の日曜日はエビチリだったが…、どうしてソースが紫色になった？そしてなぜエビがモザイクを掛けなければならないほど気持ち悪いものになった？

「もー！！絶対に皆にぎゃふんと言わせるんだから！！」

意気込むのは良いが、もう少し腕をあげてくれ。

味見をするザフィーラがかわいそうだ。

そして現在八神家の料理の腕は

俺＝はやて＞＞＞＞ザフィーラ＞＞＞シグナム＝ヴィータ＞＞＞＞越えられない壁＞＞＞＞＞＞シャマル

となっている。
精進したまえ。シャマル、応援はしておく、雀の涙程度で。

そして午後、本日は仕事は休みのため今日は庭で鍛練をしている。
実はこの世界に来てから考えていたことだが、シグナム達見たいな騎士甲冑、簡単に言えば
バリアジャケットのようなものを作れば良いのか考えていた。
しかし、後々考えてみたら俺の能力は下手したらロストロギア指定されかねない。
というかなっているかもな、猫姉妹の戦闘で。

（変身能力の応用で作るか。）

俺は『エクストリーム・ユニバース』を展開し、どのようなフォルムにするか考える。

（やはり基本はエクストリームを元にするか。武装はガンプラであったギター型のビームライフルとシールドとビームサーベルだな。特にビームサーベルはフリーダムみたいに腰に付けるとするか。）

俺はイメージを固め、変身を行う。
上半身は白を基調に黒のラインが入ったジャケット、下は黒のジーンズ、そして靴は紅色のスニーカーにした。右手にはイメージ通りギター型のビームライフル、左腕にはシールドを装備している、勿論ビームライフルの収容も可能にしている。

「よし。こんな感じか…。後は実践なんだが…、そうだ。」

俺はシグナムに念話をしてみる。
ちなみに俺はシグナム達に教えて貰ってリンカーコアを習得しているが念話がやっとできる程度だ。

（シグナム。少しいいか？）

（ｅｘ（イクス）―か、どうした。）

（少し模擬戦をしてほしい。もし（いや！直ぐに行こう！！）…おい、聞けよ。）

フィールドの展開を止めると目の前にはシグナムがいた。
しかも騎士甲冑を着て。

「ふふふ…。今日こそお前を倒させてもらうぞ！！」

ちなみにシグナムと鍛練するときはいつもタキオンでやっている。
成績は３０戦１３勝１２敗5分である。
これは単純にスピードの違いだ。
タキオンは他の2つと比べると地形対応が低いため、例え『エクストリーム・ユニバース』を展開してもシグナムの方が勝る。しかし、攻めに関して言えば圧倒的にこちらの方が勝る。
あの時も、若干俺の方がスピードが遅かったため右腕が斬り落とされたのだ。

「いや、今日は少し試してみたいことがあるんでな。すまないが今日は無しだ。」

「む…。そうか。しかし、試してみたいこととは？」

「これさ。」

俺は先ほど作ったバリアジャケットもどきに変身する。
それを見たシグナムは驚いているがすぐに冷静になる。

「なるほど。変身能力の応用で作ったのか。」

「ああ。」

「となればそれのテストか？」

「そんな所さ。」

俺は再びフィールドを展開し、ビームライフルを構える。
シグナムはレヴァンティンを構えこちらを見据える。

「行くぞ！！」

シグナムの言葉で俺たちは模擬戦を開始した。

結果はシグナムの勝利だった。
模擬戦してわかったがやはり全体的に火力不足が原因だった。
そして俺はエクストリームＶＳで使えたブーストキャンセル・ステップキャンセルが行えるが、
逆にこの世界の魔法は使えない。
例えばシールドは盾を構えた方向で防げばスターライト・ブレイカーでも防げるが、
アクセル・シューターのような全方向型は防ぐことができない。

そして武装自体がなぁ…。
まだ少しだけ時間はある。ゆっくり考えて対策を考えるとしよう…。

今日の食事当番ははやてだ。
はやての料理は基本的に和食が多い。俺はどちらかと言えば洋食・中華だ。

「やっぱはやての料理はギガうまだぜ！」

「でも…、イクにぃのデザートと比べると負けるんよなぁ…。」

「大丈夫だ。はやてのデザートも上手くなってきている。いつか俺を超えるさ。」

…やっぱり『八神食堂』を人生設計のプランに入れておこう。
シェフは俺とはやて、接待がシグナム・ヴィータ・シャマル、そして番犬でザフィーラが妥当か？
え？なんでシャマルを接待に？…客に毒物を提供うる店なんてあるか？

こうして日常は過ぎていく。
だが、確実に時間は迫っているのもまた事実だった…。

日常？～平穏が一番～（後書き）

今回新しく出たバリアジャケットもどきは次に出す能力設定で詳しく載せます。
…あまりチート無双はしたくないので。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3323z/

魔法少女リリカルなのは～極限の力～

2011年12月21日01時51分発行